

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	中原 理恵
論文題目	百二十回本『水滸伝』の版本学的研究とその受容、並びに明清時代における書肆の出版活動について		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、百二十回本『水滸伝』に関する版本学的研究を中核とし、日本における受容の一端を明らかにするとともに、明清時代の共同出版の実態解明に一石を投じたものである。</p> <p>本論に先立つ叙論では、『水滸伝』の諸版本が概観され、本論文が不分巻系の文繁本百二十回本『忠義水滸全伝』『忠義水滸全書』(以下それぞれ『全伝』『全書』と略)の版本学的研究であることが示される。なお、分巻系は百回本(容与堂刊本等)、不分巻系には百回本(遺香堂刊本等)、百二十回本(『全伝』『全書』)、七十回本(所謂金聖嘆本)が知られている。従来の研究は、成立時に近い分巻系百回本が中心であり、百二十回本でも先行する『全伝』が対象とされてきた。しかし、現存数が多いにもかかわらず研究の手薄な『全書』を取り上げることで、幸田露伴『国訳忠義水滸伝』(一九二三～二四)の底本(九州大学附属図書館蔵)が発見されるなど、本論文の意義が強調される。</p> <p>第一章「百二十回本『水滸伝』の諸版本」では、『全伝』『全書』それぞれの書誌的共通要素がまとめられ、北京大学図書館蔵本以下『全伝』十点、前田育徳会尊経閣文庫蔵本以下『全書』四十四点の書誌が、初印に近いと思われる順で記される。さらに、百二十回本と版式・正文等が酷似する不分巻百回本七点の書誌が記される。</p> <p>第二章「『忠義水滸全伝』について」では、『全伝』十点の版本流伝が詳細に考察される。前付や正文、図題の差異から甲本一点、乙本七点に区分した上で、それぞれの印刷時期が考察される。すなわち、『全伝』は明の天啓帝・崇禎帝の諱を避けていることから天啓以降の刊本とされるが、甲本の序が乙本に無いのは、序中の「夷狄」「犬羊」(異民族への蔑称)による清初の禁書処分を恐れたためであり、従って乙本は清初以降の刊行との推測が示される。また、諏訪市博物館蔵日本抄本(諏訪抄本)が、序と「宋鑑」は甲本に、正文は乙本に、それぞれ依拠していることが指摘され、精確に書写された諏訪抄本の底本が甲本から乙本への過渡期の本だった可能性が示される。さらに、『全伝』と不分巻百回本(李玄伯旧蔵本)との前後関係について、刻工名と図題の観点から考察される。</p> <p>第三章「『忠義水滸全書』について」では、版心に「郁郁堂四伝」とある郁郁堂本六点と、その後修本三十八点の版本について、同じ版木を適宜補修しつつ使い続けられたことが詳細に跡づけられる。『全書』は近世日本で最も多く受容され、現存数も多いが、郁郁堂本では前田育徳会尊経閣文庫蔵本が初印に最も近く、ほかの本に見られない特徴もあって、『全伝』に近いことが明らかにされる。次いで、尊経閣蔵本以外の郁郁堂本が同じ版木で百回本と百二十回本の二種を刊行しようとしたことが、百二十回本を改変した百回本であるカリフォルニア大学バークレー校図書館蔵本の版心表記から推論され、バークレー蔵本は尊経閣蔵本と他の郁郁堂本との間に位置すると結論される。また、郁郁堂本から別の書肆に版木が移り、版心の「郁郁堂四伝」を削って補修・彫り直しを重ねた後修本について、甲本三点、乙本三十五点に分類できること、乙本の補修は少なくとも五段階あること、彫り直しの過程でのミスが目立つこと等が明らかにされる。</p> <p>第四章「日本における『水滸伝』の受容」では、白話学習のために『水滸伝』を読んだ曲亭馬琴(一七六七～一八四八)と高島藩主諏訪忠林(一七〇三～七〇)の例が示される。知友に宛てた書簡や日記に拠れば、馬琴は『全書』七十二～七十六回に訓点を施したが、申請者が調査した中の塩谷温旧蔵・天理大学附属天理図書館蔵本(後修本乙の第三</p>			

段階で、第一章の通し番号三十二)がまさにその本であった。続いて馬琴の訓点が検証され、訓読の癖による誤解等が指摘される。次に、『全伝』(第二章の諏訪抄本)を作成・所蔵していた諏訪忠林について、その他の『水滸伝』関連写本の概要が示され、忠林による鍾伯敬本(分巻百回本)と『全伝』との校勘、鍾伯敬本の翻訳、白話語彙帖の作成などが具体的に跡づけられる。こうした学習の背景として、服部南郭、文人大名本多猗蘭との交流が指摘される。

第五章「書肆——明清時代の共同出版」では、『全書』の発行書肆郁郁堂を足がかりに、明清時代の書肆の活動が追尋され、書肆間での版木の貸し借りや、共同出版・盗版の可能性が考察される。まず、郁郁堂刊本として確認された七例のうち、『合訂西廂記文機活趣全解』(『西廂積解』)を例に、四種の異版十八点が調査され、大業堂と郁郁堂の共同出版の可能性が指摘される。次に、『廉明奇判公案』四巻本について、京都大学法学部蔵本(京大蔵本)が長く行方不明だった富岡家本だったことを示した上で、二巻本を含めた書誌が示される。四巻本で判決部分が故意に削られた「残篇故事」の有無によって、京大蔵本が中国国家図書館蔵本(国図善本)に拠った異版であること、国図善本は余氏による共同出版、あるいは盗版の可能性があることなど、出版・流通事情の一端が明らかにされる。

「終章」では、本論文の内容が要約される。

なお、本論文の理解を助ける写真図版と表が別冊附録として添付される。

(続紙 2)

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、百二十回本『水滸伝』の版本(『忠義水滸全伝』『忠義水滸全書』、以下それぞれ『全伝』『全書』と略)を博搜し、これまで手薄であった版本学的研究を行い、併せて日本での受容、中国明清時代の共同出版の実態を考察した労作である。

『水滸伝』諸版本の概観と、本研究の特長を述べた叙論では、特に九州大学附属図書館蔵の『全書』(第一章第二節の書誌番号四十)が幸田露伴旧蔵であると確認した点が意義深く、今後の研究に繋がる発見と高く評価される。

第一章「百二十回本『水滸伝』の諸版本」は、『全伝』十点、『全書』四十四点、不分巻百回本七点について、初印に近い順から書誌を記述したもので、本論文の基盤をなしている。日本・中国等の関係各機関での多年に渉る版本学的研究の精髓であり、特に冊数の多い『水滸伝』の場合、多大な労力を要したことは想像に難くない。その結晶たる本章は、従来の研究を大きく進展させるものと期待される。

『全伝』十点の版本流伝を詳細に考証した第二章「『忠義水滸全伝』について」では、「夷狄」「犬羊」の語を含む甲本の序が乙本で削除されたことから、乙本は清初以降に刊行されたと考察されるが、その蓋然性は高いと言えよう。併せて、甲本の前付と乙本の正文を持つ諏訪市博物館蔵日本抄本(諏訪抄本)の底本が、甲本から乙本への過渡期に位置した可能性があるとの指摘も重要であり、今後の発見が期待される。

近世日本で最も多く受容され、現存数も四十四点と最多の『全書』を扱う第三章「『忠義水滸全書』について」では、郁郁堂本六点と、その後修本三十八点の詳細な考証が出色である。『全書』郁郁堂本については、従来、静嘉堂文庫蔵本や国立公文書館蔵内閣文庫本に基づいて研究されてきたが、申請者は、前田育徳会尊経閣文庫蔵本(尊経閣蔵本)が初印に最も近く、かつ『全伝』に近い特徴を持つことを明らかにした。また、版心の表記から、カリフォルニア大学バークレー校図書館蔵本が尊経閣蔵本と他の郁郁堂本の間位置することを論証し、これが百二十回本の版木を利用して二十回を抜いた百回本であり、書肆郁郁堂がそうした企てを試みたことと推察した点も優れた成果と言えよう。さらに、後修本を甲本三点、乙本三十五点に分類し、乙本は少なくとも五段階を経て補修されたとの指摘は、申請者ならではの綿密で粘り強い調査の賜物である。

第四章「日本における『水滸伝』の受容」では、曲亭馬琴の手沢本を見出した点が特筆される。近世の日本人は、百二十回本を完整な『水滸伝』と考え大切に所蔵してきたとされる(高島俊男)が、古義堂・中村敬宇・依田学海・森槐南・塩谷温など著名な旧蔵者の中でも『水滸伝』の影響を強く受けた馬琴の手沢本を発見し、その読書の跡をたどって白話読解能力を検証した点は輝かしい成果と言える。さらに、高島藩主諏訪忠林が精確に書写させた諏訪抄本と関連写本との分析によって、当時諏訪忠林が鍾伯敬本(分巻百回本『水滸伝』)を見る環境にあったことなど、大名の白話学習の実態の一端を明らかにした点も意義深い。

第五章「書肆——明清時代の共同出版」では、まず、長らく行方不明だった富岡家本『廉明奇判公案』(四巻本)が現在京都大学法学部蔵(京大蔵本)となっていることを確認した点が評価される。ついで、京大蔵本と中国国家図書館蔵善本(国図善本)との比較によって、京大蔵本には存在しない話が、国図善本では判決の一部を故意に削除した状態で収録されていることから、原刊本から国図善本、京大蔵本へと特定の話が段階的に削除される珍しい事例が明らかとなった。さらに、『全書』の発行書肆郁郁堂を足がかりに、『合訂西廂記文機活趣全解』については版心に書肆名が規則正しく出現する「大業堂」と「郁郁堂」の関係を、また『廉明奇判公案』については余氏の親族間相互の関係を、それぞれ追究した点は、未解明な部分の多い中国での共同出版

の研究に一石を投じたものと言えよう。

以上のように、本論文は大部の版本調査に基づく実証的研究であり、別冊の豊富な写真図版・表と相俟って、その論述に強い説得性を有する。

もちろん、申請者も認めるように、未調査の百二十回本版本や明清時代の共同出版など、さらなる調査研究は必要であろう。しかし、今後より多くの版本を調査するなかで、本論文の考察は補強されるものと期待される。

『全伝』『全書』を中心に、その書誌、版本の変遷、日本での受容、中国での共同出版の実態などを追尋した本論文は、従来の研究を格段に深め、数多くの新見をもたらしたものであり、大いに学界を裨益するものと評価される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年6月1日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版慣行上の支障が無くなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降